

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 12 日現在

機関番号：32643

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2010～2013

課題番号：22730656

研究課題名(和文) 中学・高校生のメディア利用と教育的統制に関する社会学的研究

研究課題名(英文) A sociological study about the media use by the junior high school / the high school students and the educational control.

研究代表者

大多和 直樹 (OTAWA, Naoki)

帝京大学・教育学部・准教授

研究者番号：60302600

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円、(間接経費) 930,000円

研究成果の概要(和文)：中学生においては、ネットやケータイの利用は概ね常識的範囲に収まっており、多くの生徒は、マスメディアで喧伝されているような問題とは直接関わっていないということが窺える調査結果がみられた。しかしながら、ケータイを巡っては女子のアクティブユーザーを出現させ、彼女たちがクラスを中心として新たな生徒文化を作り出していることがみえてきた。

研究成果の概要(英文)： The use of the Internet and mobile phones by junior high-school students remained in the common-sense range and many students did not experience a serious trouble. However we found out that there were female students who actively used mobile phones and a new student culture has been established in the classroom.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育社会学

キーワード：携帯電話 生徒指導 生徒文化 若者論 メディア・コミュニケーション

1. 研究開始当初の背景

中学・高校生のメディア利用は、彼/女らの安全が脅かされるという問題に留まらず、学校教育に対するインパクトを強く持っており、生徒指導のあり方を変容させ、新しい生徒文化が生起させている可能性がある。

これまで若者のメディア利用については、多くの研究がなされてきたが、そうした研究では学校(生徒)が十分に視野に入れられてこなかった。すなわち、現在はまだ、中学・高校生のメディア利用が学校教育にたいしてどのような問題性を孕み、どのように学校教育を変えているのかについて、その全容は十分に明らかにされているとは言えない。

2. 研究の目的

本研究の目的は、中学・高校生が利用するメディアの問題を学校社会学の中に位置づけ、ネットやケータイが当たり前となった現代の学校において、過去と比較した場合に生徒指導のあり方がどのように変わっているのか、生徒文化や学校秩序(規範のあり方や教師生徒関係のあり方など)がどのようなものとなっているのかを明らかにする。

とくに生徒文化については、ケータイやネットのコミュニケーションが、学校適応や逸脱の様式を変容させてきている可能性がある。従来、中学・高校生の逸脱行動は、比較的単純なメカニズムで捉えることができた。耳塚寛明(1980「生徒文化の分化に関する研究」『教育社会学研究』第35集,pp.111-122.)が定式化したように、学校ランクの上位の学校に属する生徒や成績のよい生徒ほど、向学校的な文化を身につけ(学業に高くコミットしたり、学校的な価値観を受け入れたりするなど)、逆に学校ランクの下位の学校に属する生徒や成績のよい生徒ほど反学校的ないしは逸脱的な文化を身につける。つまり学業のパフォーマンスが高いほど学校適応が進むという説明図式で捉えることが可能であった。これはわが国の学校社会学が明らかにした知見の一つである。しかし、ケータイ・コミュニケーションは、こうした伝統的な図式では解釈できない生徒の類型を生み出している可能性がある。

なお、研究の過程で中学生を対象を絞って調査を実施する戦略をとった。

3. 研究の方法

以下の4つの調査を通じた実証的なアプローチをとった。

(1)中学生対象:メディア利用と生徒文化に関する質問紙調査

中学生がどのようなメディア利用をしているのか、そのことが生徒文化や教室の秩序とどのような関係になるのかを調査した。

(2)中学生対象:メディア利用とコミュニケーションに関する聞き取り調査

まず実際に中学生がどのようにメディアを利用し、どのようなコミュニケーションを行っているのか。また、それに伴うトラブルが発生しているのかについての事例を収集した。

(3)中学教師対象:生徒のメディア利用と生徒指導に関する聞き取り調査

まずは、実際の現在の生徒指導において、ケータイ/ネットがどのような生徒指導上の問題を引き起こしているのか、これらのメディアをどのように規制しているのか、について調査を行った。

(4)ネット調査:「学校裏サイト」調査

ネット上にある、いわゆる「学校裏サイト」がどのような場になっているのか、そこにどのような問題があるのかについて調査を行った。

4. 研究成果

(1)中学生対象:メディア利用と生徒文化に関する質問紙調査

普通の中学生がケータイ等のメディアをどのように日常的に使用しているのかを捉えることができた。ここでは、マスメディア等で喧伝されるようなケータイ利用の問題が広くみられるのではなく、一部の生徒にみられる逸脱的な事例であることがみえてきた。

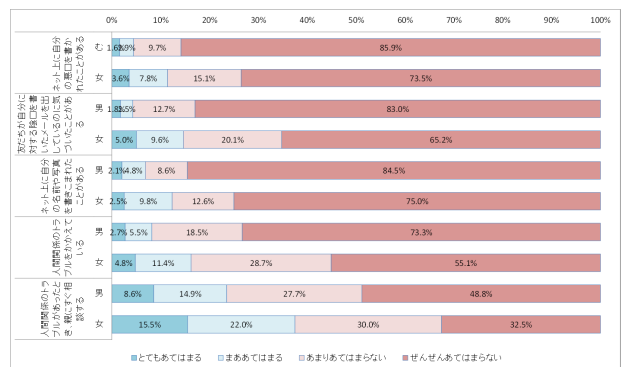


図1 ネット関係のトラブル

ネット関係のトラブルに巻き込まれた生徒の割合は、おおむね10%台にとどまっている。10%という値をどう位置づけるか(10人に一人も巻き込まれているともみることができる)という問題はあがあるが、大部分の生徒はトラブルを経験しているわけではないということを示すことができる。

友人とのコミュニケーションの頻度をみると、ケータイを持っていない生徒よりも持っているのに使っていない生徒のほうが(対面的コミュニケーションを含め)コミュニケーションを苦手としていることがみえてきた。

ケータイというメディアがコミュニケーションを活発化させるといようなメディア決定論では捉えられないことを示している。

ケータイにかんしては、ジェンダーによる差異が大きいことがみえてきた。女子のほうがケータイを使っており、同時に前掲図1をみるに女子のほうがトラブルに巻き込まれていることが分かる。

表1 アクティブユーザーとトラブル

質問項目	男子			女子		
	非AC	中間層	AC	非AC	中間層	AC
人間関係のトラブルを抱えている	6.1%	6.9%	13.4%	15.6%	14.8%	18.1%
ネット上に自分の悪口を書かれたことがある	2.3%	6.4%	3.5%	9.6%	10.0%	17.9% *
ネット上に自分の名前や写真を書き込まれたことがある	2.8%	8.8%	8.6%	8.4%	12.3%	14.9%
友だちが自分に対する陰口を書いたメールを出しているのに気づいたことがある	2.3%	5.2%	6.0% *	9.8%	12.8%	24.9% ***

p. * < .05 ** < .01 *** < .001

ケータイのトラブルは、女子のアクティブユーザーに偏在化していることもみえてきた。

ケータイなどへの保護者からのコントロールもまた男女であり方がことなっているという結果がみられた。

表2 メディアへのコントロール(男女別)

選択肢	男子		女子			
	母非大卒	母大卒	母非大卒	母大卒		
「ケータイの利用	22.5%	17.1%	NS	29.1%	18.5% **	
フィルタリングがかかっている	ととも	39.9%	42.3%	NS	33.2%	45.3% ***
ネットの使い方にについて保護者と取り決めがある	ととも	28.1%	28.7%	NS	25.0%	37.1% **
教科書の内容が難しすぎて行けない科目が多い	あてはまるかもしれない	31.5%	29.8%	NS	53.1%	38.9% **
大学への進学	可能性があると思う	28.7%	40.9%	**	22.4%	41.0% ***

女子において、大卒の母親をもつ生徒が非大卒の母親を持つ生徒よりも、ケータイなどのパーソナルメディアのコントロールを受けていることが分かった。

新しい生徒文化の成立という点では、向学校-反学校の軸で捉えきれない生徒文化が成立していることがみえてきた。学習へのコミットメントは低いものの、クラスの中心になるような生徒の存在を捉えることができた。

(2) 中学生対象:メディア利用とコミュニケーションに関する聞き取り調査

現代の中学生は、すでにネットやケータイに危険性が含まれていることを熟知し、そうしたなかで利用していること、その背景には、親によるコントロールがある程度いきとどいているという事情があることがみえてきた。しかし、本人たちもそうしたトラブルに注意しつつも 一部の生徒にとっては、ネットに実名や写真を出すことを別の次元の問題と捉える姿もみられ、 と のギャップをどう考えるのかに課題があることがみえてきた。

(3) 中学教師対象:生徒のメディア利用と生

徒指導に関する聞き取り調査

生徒指導上の問題としては、(調査地域においては)「学校裏サイト」はあまり問題になっていないこと、また、ネット・ケータイの問題は、講習を開くなどの懸案事項ではあるものの生徒指導の大部分を占めているとはいえないことがみえてきた。しかしながら、一つ事件が起きると、大問題につながる危険性をもっており、実際、対応に相当の労力が必要となるような性質のものであることもみえてきた。

ここでも、女子がトラブルに巻き込まれる問題が顕在化していることがみえてきた。

(4) ネット調査:「学校裏サイト」調査

「裏サイト」といっても、多くの場合には他愛もないやりとりが続くこと、したがって、それがすぐにネットいじめやトラブルに結びつくものではないことがみえてきた。

また、「2ちゃんねる」などのネットの「流儀」を真似た書き方がみられ、その意味でどぎつい表現が使われているものの、そうした一般的なネット情報を超えた先鋭性を有していないこともみえてきた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

小林至道(研究協力者) 2013「ケータイをアクティブに利用している生徒の特質:生徒文化におけるジェンダー差に着目して」『教育研究(青山学院大学)』vol.57 pp.85-105(査読なし)

〔学会発表〕(計1件)

大多和直樹・小林至道(研究協力者)・中西啓喜(研究協力者)2012「中学生のケータイ・ネット利用にみる現代の生徒文化-「首都圏X市」における中学生対象質問紙調査より-」日本教育社会学会第64回大会 於:同志社大学

〔図書〕(計2件)

近刊:大多和直樹 2014「Chapter 4 マルチメディアとしてのケータイ」『放課後の社会学』北樹出版 pp.55-67

原 清治・大多和直樹・小林至道(研究協力者) 2011「子どもだけの世界を理解すること 大多和直樹氏・小林至道氏へのインタビュー」原 清治・山内 乾史編著『ネットいじめはなぜ「痛い」のか』ミネルバ書房 pp.156-188

〔産業財産権〕なし

〔その他〕

ホームページ等 なし(公開・取りやめ)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大多和直樹 (OTAWA, Naoki)

帝京大学・教育学部・准教授

研究者番号：60302600

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし